

[翻訳]

形而上学と価値

岡部 勉

METAPHYSICS AND VALUE

Tsutomu OKABE

(以下は、Paul Grice, *The Conception of Value*, edited by Judith Baker, Oxford: Oxford University Press, 1991の核心部分、The Carus Lectures on the Conception of Value の第3章 Metaphysics and Value*¹を翻訳したものです。前にも同じことを言いましたが、*² グライスの文章はひどく息が長い上に、恐ろしく不親切です。少しでも読みやすくするためにいろいろ工夫したつもりですが、理解がいくらか難しいところが、多少は残ったかもしれません。全体をいくつかの部分に分けて、それぞれに見出しをつけました。そのどちらも、原文にはないものです。訳語はできるだけ統一しようとしたのですが、最終的にはこだわらないことにしました。この翻訳は4年前の読書会の成果です。根気よくつきあってくれた、長友敬一、吉田李佳、百武伸也各氏に、ここに改めて謝意を表します。)

1 序

この講義¹⁾の主要な目的は、価値の概念に関するある種の形而上学的説明と、同概念に対する積極的な裏づけとを、提供する可能性を探求することにあります。それを開始するにあたって、ひとつふたつ、方法論に関する考え方を述べておくのが適切であろうと思います。ところで、ジョージ・マイロ*³がかつてみなさんに、私にまつわる話をしたことがあります。その話は

本当に、真実らしく聞こえるものです。そこで、私はこれからみなさんに別の話をしましょう。この話が、同じように真実らしく聞こえるものであって欲しいと思います。私がまだほんの子どもであったとき、母が私に磁器製のビール・ジョッキをくれました。私はそれがとても気に入っていました。実際、ビールを飲むためだけでなく、他の多くの目的のために、私はそれを使用しました。例えば、隣人の家に火をつけたかったときに、そこへガソリン（あるいは、私たちの以前の呼び方だと、「ペترول」）を運ぶためというような。ある日、私はそれを落としてしまいました。その結果、それは粉々になりました。ちょうどそのとき、母がその場に居合わせました。そして、母が私にくれた、私が本当に愛していた、そのカップを壊したことで、母は私を叱りました。私は彼女に言いました。「お母さん」（私の家族はいくらか型苦しい仕方でお互いを呼んでいました。）「お母さん、僕は何も壊したりしなかったよ。僕はそれを少し配列し直ただけなんだ。」母は、議論による馬上試合で私とひと勝負するには、頭の回転の方は不十分でしたが、あまりに賢明でしたので、悲しげに私を見て言いました。「大きくなったら、お前は学ばなくてはいけないよ。」この出来事が後の私の哲学的歩みを形成したように、今の私には思われます。私は実際、結局は学んだのだと思います。まず第一に、私が従おうと努めることになる形而上学のプログラムは、還元主義者のそれではなくて、構成主義者のそれになるでしょう。私が思い描く手順は、もし省略せずに実行するとしたら、ある種の構成要素をもってはじまることになるでしょう。それらの構成要素は、形而上学的に第一のものとして考えられるべきであるということと、それらを出発点として、そこから段階的に、組織的な形而上学理論（あるいは、いくつかの連続した理論）を構築すべきであるということを要求するものでしょう。しかし、次のように主張することは、私の計画には含まれないでしょう。すなわち、私たちの話の最後は、「本当のところは、ただこれこれしかじかのことでしかないのだ」とか、あるいは、私の企てが産み出すものについて話をするのは、本当のところは、第一の素材について話をするための、あるいはまた、比較的ありふれたそういった類の他のいかなる要求をするのであれ、そのための、圧縮された方法にすぎないと主張することです。カルナップのように、自分は構

成のプログラムに従事していると思っていた人たちの多くは、本当は、精神と心情において還元主義者ではないかと私は思います。彼らは、私たちが所属しているごちゃごちゃした世界は、結局は、単純な成分からなる多数の複合体に還元されるということを示したがつています。私のプログラムは、そういうものではありません。私は、世界の精巧な調度品を、いくつかの単純な台所用品に解体したくはありません。私は、そのすべての豊かさのままに、それを保持することを望んでいます。私はむしろ、比較的単純な出発点から、そのような豊かさには到達する形而上学的プロセスというものを理解しようと努めたいと思います。私は、根源的な原子の複合体への「縮約」のようなものは、何も提示するつもりはありません。

私が考えている類の構成主義者のプログラムを遂行するためには、次の三つのものを私は必要とするでしょう。第一に、ひと組の形而上学的出発点、すなわち、形而上学的に第一であるようなものです。第二に、ひと組の承認された構成手順、それによって、第一のものとは異なるものが、第一のもの（あるいは、より第一のものに近いもの）を基礎として構築されることになります。そして第三に、任意の所与の段階からもっと先の段階へ進むための、理論上の動機です。上記の手順が適用できるという単なる可能性は、それだけでは、新しい形而上学的段階が与えられるために、十分ではないからです。そういう展開をするための正当化が必要でしょう。それは、何らかの目的に適うものでなければなりません。

自分が詳細に（いつの日か、今日よりはかなり詳細に）このプログラムを実行するとしたら、そのやり方の概略は、以下のようなものです。まず最初に、私は、理論とは何であるかに関する正式の特徴づけ（私が理論の理論として考えるものの実行）を手に入れようとするところからはじめるでしょう。私が望んでいるのは、理論化とはどういうことかを明確にすることが、ある特定の種類の理論化（あるいは、理論）を次のようなものとして同定することへと、恣意的ではない仕方で導くことです。すなわち、他のすべての種類の理論化に対して先なるものであって、第一の理論（あるいは、第一の哲学）の名称に値するものとしてです。この第一の理論化というのは、形而上学的な理論化として認め得るものであると私は予想しています。そして、

もし認め得るとしたら、その場合には私たちは、形而上学について提案されたある説明が、この学問に関する私たちの直観的な考え方にうまく合うかどうかをただ考えるというよりは、もっと組織的な仕方で、形而上学の性格と内容の明確化を手に入れることができるでしょう。私は、この種の形而上学的プログラムの実現が、次のような存在者（存在者タイプ）のつながりを通して、私たちを連続的に導くことを望んでいます。そのつながりは、ある段階で特殊者を含み、そしてそれに続くものがある、その中にはとりわけ特権的な種類のもの（つまり、実体）がある、というようなものです。新たに導入されたそれぞれの存在者タイプは、それと同時に、既に獲得されている理論体系を補う、理論のある部分を持ち込むことでしょう。その部分は、それと関連づけられている存在者タイプ（あるいは、複数の存在者タイプ）の主要な性格を明らかにするのに役立つでしょう。

価値の概念を確定することに、以上のようなプログラムに従った考え方を適用する試みは、以下のような仕方で達成されるでしょう。価値の観念、あるいは、絶対的価値のような、何らか特別に重要である、または、基本的であるような種類の価値の観念が、この形而上学的進化のプロセスの、ある特定の段階において、ある不可欠の位置を占めるものとして示されるでしょう。価値の観念の、以上のような形而上学的正当化は、恐らくは、『ニコマコス倫理学』を『靈魂論』に、後者の結論部分として、*4（適切に統合する仕方で）追加してみたその結果に相当するかもしれません。私たちは、まず最初に、次第に複雑になる生物のつながりを特定することからはじめるでしょう。そして、そうしたつながりの最後に出現する、最も複雑なタイプの生物に随伴する理論の一部を、本質的に構成するものとして、価値の観念を提示するでしょう。私の言う構成主義がカルナップ的な性格のものではないということは、恐らくは、次のようにして証明されるでしょう。すなわち、形而上学的展開の各段階に関して理論上の正当化の必要性を主張することには、そのような段階を省略するとあるまともな形而上学的要求を正当に扱わないことになるという考え方が含まれ得ると、私が考えることによってです。

2 生命と目的

以上のような形而上学の話から抜粋して、今日は次のようなところからはじめたいと思います。すなわち、そのすべてではないが、そのうちのいくつかが個別の実体とみなされるように準備されているものを含む、それ以前に生成された特殊者の在庫に、次第に複雑になる一連の項目が付け加えられるところからです。そして、(生物としての)それらは、ある人(恐らくは、アリストテレス)によって、上昇する形而上学的階梯における、本来の意味で実体の名に値する、最も初期の項目として考えられるでしょう。徐々に展開しつつある私の話のこの段階における、私の最初の形而上学的目的は、生物の観念は、目的とか最終目的(finality)とか目的因といった(諸)観念を前提とするものであり、そういったことを理解せずには理解することができないものであるという、魅力的でないとは言えない考え方について、そう考える理由を提示することにあります。私の見方からすると、この考え方は、魅力的であるだけでなく、正しくもあります。しかしながら、悲しむべきデフレ傾向の人々がいることを、私は承知しています。最終目的とか目的因という観念に言及することは、生物について話をするための有益で啓発的なやり方を、多くの文脈で提供してくれるかもしれないのですが、その人々は、そういう観念は生物学の形而上学において真剣に受けとめられるべきではないとか、それらは生命と生物の本性に関する理論的説明にとって必要ではないと主張するでしょう。生物の本性についての目的論的(あるいは、「生氣論的^{*5}」)な説明においては、以下のような考え方が支配的な(恐らくはまた、非生氣論者にも開かれている)考え方とみなされるでしょう。すなわち、1) 生命は、ひどくおおざっぱには、しっかりと織り合わされたひと組の能力を所有することから成るものであり、それぞれの能力が、一定の度合において充足されることが、その能力の組み合わせが全体として保持されるために必要である、2) どんな能力であれ、その能力に関するかなり重大な不具合は、残りすべての、流れとしては不可逆的な、損失をもたらす、そして、それは死を意味すると人は言うかもしれない、というような考え方です。最

終目的という観念は、複数の理由で、不可避免的に生の概念に埋め込まれていると考えられるでしょう。一つの理由は次のようなものでしょう。すなわち、無際限に拡大する個体ではなくて、無際限に長い生物の連鎖があって、それぞれの個体は、その連鎖において先立つものによって、その先立つものから産出されるというのが、何らかの仕方では生き物の本質であるとしたら、自分自身の中に自分の全子孫の実現された身体を包含しようとして、途方もない量の個体を持つことになるのを避けるために、成長と成熟というやり方を導入することが必要になる、というものです。そして、こうしたやり方といっしょに、最終目的も生じるでしょう。なぜなら、成長と成熟を通して到達される状態というのは、生き物がそれを求め、それへ向かって努力する（必ずしも意識的な仕方ではないかもしれませんが）状態でなければならないからです。最終目的という観念が生じなければならないと提案されることになる別の仕方は、次のようなものです。その程度がどれほどであれ、少なくとも複雑な生き物においては、さまざまな器官とか部分、あるいは、そういったものを組み合わせたものの働きによって、その生命機能の遂行はなされなければならないでしょう。また、こういったそれぞれの器官とか部分には、いわばそれによってなされる仕事があるでしょう。そして実際、部分（すなわち、単に空間の一部を占める部分ではなくて、働きを持つ機能的な部分）としてのその役割は、それがこれこれの仕事とか機能（目は見えるもの、足は歩くものなどといった）を持つ何かであることによって決定されます。そして、そういった仕事とか機能は、有機体全体のある特徴との関係によって、最も明白には有機体の持続的存在のような何かとの関係によって区分されなければなりません。有機体の持続は、通常は多分、有機体の機能とは呼ばれませんが、それでも、私たちが（有機体の）部分としての（それぞれの）部分の本性を説明することができるようになるためには、有機体がそれを求めて努力する何かとして必要でしょう。そういう持続、あるいはそういう類の何かに対して、それぞれの部分はそれぞれに特有の仕方では貢献するでしょう。最終目的が場面に登場する理由の第一番目に関して、ある生物の祖先の中にその生物が実際に含まれるとする考え方に置き換えて、潜在的に（そこに）含まれると考えることができることは注目に値します。それは、祖先となる

生物の身体に関して、少しもインフレーションを生じさせることなしに、いわば、(時間の上で) 後方に延長できるとするような考え方です。

恐らくは、私はここで、私が提案しようとしている計画に関して、二つの周辺のコメントをすることが許されるでしょう。まず最初に、私が生の觀念について議論する際に、生き物とか生き物の部分、あるいは生き物の働きに、目的とか最終目的を帰属させることを平気ですとしたら、そのような目的とか最終目的というのは、その目的を抱くどんな者からも、すなわち、意識的にであれ無意識的にであれ、その目的とか最終目的を抱く、世俗のであれ天界のであれ、どんな生き物または存在からも、切り離されていると考えられるのでなければなりません。もしセイウチまたはセイウチの口髭に目的があるとしたら、それは、セイウチの目的またはその口髭の目的だとしても、セイウチが抱く目的でもなければ、その口髭が抱く目的でも、あるいは、神が抱く目的ですらないでしょう。この点を理解しないことが、最終目的という觀念を、生物学の哲学の内部において、まじめに適用しようとするのが被ってきた悪評のいくつかに、責任があると私は思います。第二に、もし誰かが説明のよりどころとして最終目的を当てにするとして(もしそうしないとしたら、それを持ち出す理由は何でしょうか)、もしそのひとが、説明のあり方として、アリストテレスの四原因のすべて(あるいは、二つ以上でも)を使用することを本当に望むとしたら、その場合、そのひとは、説明を求めるためのただ一つの形式があると思っているととられるべきではないでしょう。説明の要求に対する適切な応答は、時に応じて、今回はこのタイプの説明、今回はあのタイプの、たぶん場合によっては、二つ以上のタイプの説明、でしょう。それは、ただ一種類の「なぜ」という問いがあって、それに対して、代わりの答えがあるとか、場合によっては、複数の競合しさえする類の答えがあるということではありません。何種類もの「なぜ」という問いがあって、異なる種類の「なぜ」という問いは、範疇的に異なる種類の説明の候補と恐らくは結びついていて、それぞれの種類の問いは、それぞれに固有の種類の原因、それぞれに固有のタイプの説明を求めるものでしょう。そして、異なるタイプの原因どうしは、競合するどころか、協働する、あるいは作用し合う、ものですらあるかもしれません。例えば、目的因の(実効

ある) 働きは、適切に結びついている被説明項に関する、作用因または質量因の働きを要求し、その働きによって可能となるだけであるのかもしれませんが。ある種類の有機体に、ある器官がなぜ存在するのかを問う問いに対する、最終目的による説明が成功するかどうかは、その器官がどのようにして存在するようになったかに関する、適切な作用因による説明を手に入れることができるかどうかによるかもしれません。

3 機械論に対して

それでも、以上のような鎮痛緩和的表現によっては、筋金入りの機械論者が宥められることはないと思います。そのような機械論者は、適度に分別があるどんな生氣論者にも、ある一定の特徴とか能力の存在がある一定のタイプの生き物に有利であるという単なる事実は、作用因の働きがそのタイプの生き物に、その特徴あるいは能力が存在することに関して実際に与える保証を、何ら与えはしないということを認めさせることができるでしょう。そうすると、目的論的説明は、性格的には予言的なものではないということ、生氣論者は認めなければならないでしょう。これに対して機械論者は、予言的なものではない説明というのは、本当は説明ではぜんぜんないと応酬するものと、多かれ少なかれ考えられます。機械論者は、生き残るというのは、あるタイプの生き物が生き残ることを、それがふさわしくされると言われるような、そういう特徴を持った結果(の一部)であるということを認める用意ができています。そして、恐らくはまた、その結果というのは、そうした特徴が存在することから生じる、有益な結果または報酬であることを認める用意もできています。しかし、その生き物は、自分が生き残るために、そうした特徴を持つようになるということを認める用意はないでしょう。この議論で使用する用語を少し洗練させましょう。ひとは、ある一定の特徴がなぜ存在するのかという問いと、その特徴がなぜ(あるいは、どのようにして)存在するようになるのかという問いを、区別しようとするでしょう。機械論に傾く心性を持つ哲学者は、第一の問いが第二の問いと異なるとしたら、それは理解可能なものであるのかどうかを疑う者として描かれ

るでしょう。そしてまた、次のように主張する用意ができている者としても描かれるでしょう。すなわち、もし、二つの問いが結局は異なるものであって、どちらもまともな問いだとしたら、第一の問いに対して答えを与えることが、第二の問いに対する答えがあるということを要求することになるとは考えられない、第一の問いに対して答えを与えることは、実際、その特徴が存在するに至ったという独立した情報が与えられる場合にだけ可能であると主張することです。

さらに、機械論者は、生气論者（あるいは、目的論者）が説明のためのツールとして最終目的を持ち出したがるような他の領域に関して、そのようなものの助けを当てにしなくても、生气論者を最終目的にすぎるように導く類の現象を、まったく適切な仕方では説明することができるでしょう。そして、ネガティブ・フィードバックとか恒常性のような、人工頭脳学の観念^{*6}を展開するという類の、特別な種類の作用因による説明を用いるでしょう。そうすると、機械論的な哲学者のひとり、デイヴィッド・アームストロング^{*7}が示唆したように、人は誘導ミサイルのようなものになるでしょう。

これに対して、生气論者は、目的論的な装置を具体化するような生物学的説明があってもよいとすることは、ある意味ではすべてを説明する（物理学や化学のような）優れた意味での科学の能力に対して、礼を失することになりはしないと主張するでしょう。もし私が、市場にいる17人の人それぞれについて、その人がなぜそこにいるのかを説明することができるとしたら、ある意味では、なぜ17人の人が市場にいるのかを、私は説明することができます。そしてまた、市場にいたかもしれない他の人たちも、なぜ実際には他の場所にいるのかを、私は説明することができます。しかし、こういうことを全部しても、なぜ17人の人が市場にいるのかは説明されない（あるいは、少なくとも直接的には説明されない）とすべき、理解可能な意味があります。「説明の間隙」を埋めるために、つまり、市場に17人の人がいることについて、単に間接的に説明するのではなくて、直接的に説明する、すなわち、市場に17人の人がいることとしてそれを説明するために、私は新しい理論、恐らくは、社会心理学の何か非常にいかがわしい分野を導入しなければならないでしょう。そして、恐らくはカタストロフィー理論^{*8}がそうだと思います

が、いくつかの科学理論は、既存の理論によって何らかの意味で既に説明されている事柄について、「説明する」のより強い意味で説明するために、およそ以上のような仕方で、万能ではないにしても完全に申し分ない先行する理論を（いわば）後ろ盾にして、生まれてきたのではないかと私は思います。

これに対して機械論者は、私たちが生物学の説明装置を物理学や化学などのいわゆる科学に追加することによって、そしてその結果、動物のふるまいのような現象を、単に間接的にというのではなくて、むしろ直接的に説明する能力を自らに与えることによって、私たちの説明能力を強化するための、実際もっともな理由がある（あった）のだと応酬するでしょう。しかしだからといって、生物学によって持ち込まれることになった装置に、何らかの目的論的な概念とか説明が含まれるべきであるということにはならないと言うでしょう。そして、生物学的な用語でなされる説明は、素性が疑わしいとか問題であるような概念に、少しも頼ることなしに、人工頭脳学の用語で完全に理解することができるでしょう。

機械論者によるこの、最新のやっかいな干渉に対応するために、私は今度は、それぞれの理論ないし理論の段階が、その前段階のものを含むことになる、理論ないし理論の段階の、累積的で連続的な展開を導く手順の、主要な特徴と私が考えるものに言及したいと思います。すなわち、私がオーバラップと呼ぶものの登場です。理論ないし理論のある段階Aを引き継いでそれを含むことになる、ある理論ないし理論の段階Bを提示する際に、恐らくは、理論Aのある部分に関する「再記述」を提供してくれる、ある理論上の装置を導入することになるでしょう。例えば、数学を展開する際に、正と負の整数の概念を、私は導入するでしょう。そして、もし私が、この新しい概念が含む領域のうちの、正の整数だけに関わる部分に、自分の関心を限定するとしたら、そのそれぞれが自然数に関する数式によって言われることを「再記述」するものとなる、ひと組の数式を私は得るでしょう。しかし、話すためには（あるいは、書くためには）前段階のやり方の方が、はるかにより経済的でしょうから、争いになったら、自然数の方が勝つでしょう。そして、正の整数だけに関する定理というのは、自然数に関する、既に利用可能な定理を正確に反映するものでしょうから、この革新は無駄になるでしょう。しか

し、もちろん、正の整数だけに対して、近視眼的な（あるいは、目隠しされた）仕方でも目を向けることは、正と負の整数という新しい集合を導入すること全体が持つ意味、すなわち、自然数の領域よりも広い領域に対して、単一組の算術演算法を、つまり、適用範囲がより広い算術の規則の詳細を、全体として与えるということが持つ意味を、無視することになるでしょう。それが、つまり、そのような算術演算法の適用範囲を広げることが、新たに導入された整数の存在理由です。いくらか似た例として、もし有限な対象の集合に関する普遍的な言明の事例だけに注意が向けられるとしたら、普遍的な言明の表現というのは、一群の個別的な言明の連言に等価である（あるいは、その要約である）と、もっともなこととして思われるでしょう。そして、実際、たまに哲学者は（特に、ミルがそうであったように）、こうした考え方によって導かれてきました。しかし、もちろん、普遍的な言明を導入する意味の、少なくとも一部は、有限の集合に限定される段階を超えること、すなわち、普遍的な言明を単純に単独の言明の要約と見なすことができるような段階を超えることにあります。

ここでの議論に関連させて言うと、（意識から）切り離された最終目的に関する議論は、人工頭脳学が関心を持つような、特殊な種類の因果連関を含む、因果連関（作用因的な、あるいは、質量因的な）に関する議論に自ら閉じこもろうとする体系の、拡張とか拡大であるような体系に属するものと見なされると言われるかもしれませんが。そして、もしそうだとすると、最終目的が、人工頭脳学が手持ちとするような何か特別な形式の因果連関とオーバラップの関係にあるということは、単に驚きであるというだけではなくて、体系の拡張が首尾よく実施されるために間違いなく必要であると言われるでしょう。以上二つの概念的な形式（最終目的と人工頭脳学的な因果連関）の間の関係を分析するためには、最終目的に関する話がもはや因果連関に関する話に写像できない、オーバラップを超えた領域があるかどうかを知ることが必要になるでしょう。そして、この分離がもし生じるとしたら、それが生じる場所を、そこに探するのが自然であると私に思われるその場所というのは、絶対的価値の属性が見出される領域、そして、最終目的に関する話が、何が絶対的価値の属性かという話と、並行してなされる領域にあるでしょう。そうする

と、フィリッパ・フット^{*9}のような人たちがしたように、もし、絶対的価値がその居住者として正当な資格を持つ、形而上学的領域というもの何らか存在することを否定する場合には、最終目的と因果連関の間の概念的な関係を決定するために必要な、まさにその検査の場所から、もっともな理由があるのかもしれませんが、自ら離れ去ることになるように思われます。この問題には、後でまた戻ることになります。

4 目的と本質

この講義で私が最終目的の話をする場合には、私はいつも、(意識から)切り離された最終目的と私が呼ぶもの、すなわち、どんな(目的の)所有者からも切り離された目的、つまり、その内容が何であれ、それを自分の目的として所有する、意識的な存在者がまったく存在しなくても、存在することができるような目的のことを意味しています。ところで、私が設定したい、最終目的に関連するいくつかの区別があります。第一に、ある何かがある最終目的を持つというのは、そのもの持つ本質的な特性か偶然的な特性か、そのどちらかでしょう。私が考える本質的特性というのは、ある種とか類の定義的特性であるような特性のことであり、また、それと同時に、その種とか類に所属する実体の同一性条件と密接に結びついた特性のことです。[ある種とか類の定義的特性が、その種とか類を構成するメンバーの同一性条件に組み入れられるということは、その種とか類が実体としての種とか類であるための基準であると、実際、受け取られるでしょう。] ものの本質的特性とは、そのものが存在することをやめずに(もしそう言いたいなら、自己自身と同一であることをやめずに)失うことはできないような特性のことです。

ある種とか類の本質的特性は、その種とか類にとって必要不可欠な特性、その種とか類に所属するものが持っていなければならない特性と、同一視されてはならないということは明白です。なぜなら、本質的特性が存在すると、ある特性の存在が論理的あるいは形而上学的必然性によって保証されることになる、そういう特性は、そのことによって、その種とか類の本質的特性の

一部、すなわち、その種とか類を構成する特性の一部となる、ということはないと思われるからです。さらにまた、テリー・アーウィンとアラン・コード^{*10}の指摘に目を向けることによって、生物の種とか類の場合、ある種とか類に本質的であるような特性は、その種とか類の個体事例に、不変的に存在するものではないので、その種とか類に必ずしも必要不可欠な特性ではないであろうと私は思うようになりました。もし必要不可欠ではないということが実際にあり得るとしたら、その可能性は、生物の種とか類の構成員としての資格は、それがどのような性質を持つかによってではなくて（あるいは、単にどのような性質を持つかによってではなくて）、祖先から与えられるという事実から生じるでしょう。例えば、ある生物種の変異的な（あるいは、退行的な）事例の場合、その両親（あるいは、両親に当たる直接の祖先）はその種とか類のある本質的な特徴を示すものであったとしても、その特徴を欠くことがあるでしょう。

本質的特性の考え方に見出される二つの要素（ある種とか類を定義するものであるというそれと、その種とか類の構成員の同一性条件を設定するものであるというそれ）の間のつながりは、もし、存在することとある一定の種とか類の構成員であることは同一のことであるという、アリストテレスの考え方を、存在の観念に含まれる多様性に関する、そこから帰結する妥当な考え方とあわせて採用するならば、大いに理解しやすいものになります。ところで、私の考え（それはまた、アリストテレスの考えでもあると思います）では、あれとかこれとかのもの種とか類の本質的特性の範囲には、時には（あるいは、恐らくは常にということも）、私が「最終目的な特性」と呼ぶもの、すなわち、（意識から）切り離された最終目的を所有することによって持つことになるような特性が含まれるでしょう。

私が設定したい第二の区別は、能動的な最終目的と受動的な最終目的の間のそれです。すなわち、あるものが、いわば、なすと想定されることが何であるかということと、他方では、あるものがなされると想定されることが何であるか、とりわけ、それが用いられると想定される用途を含めて、それに対して（あるいは、それを対象として）何がなされてきたかといったことの間の区別です。一部の専門家は、能動的な種類の最終目的は、職業とか役割

のようなものだと言うでしょう。能動的活動には多様なあり方があり得るとすることは、もちろん、能動的な最終目的の範囲の内部で可能でしょう。例えば、虎の「活動」は正當に「活動」と呼ばれるものでしょうが、学者の「活動」とは異なった「語の意味」で「活動」であるとひとはいいたくなるでしょう。私の考えでは、あらゆる種類の生き物、そして、どのような種類のものであれ、その種とか類に所属するすべての個体は、さまざまな生き物の一種類であるという、あるいは、ある種類の生き物であるという事実によって、能動的な最終目的を本質的特性として持たなければならないでしょう。虎である、あるいは、人間であるということは、それがどういうものとして考えられるのであれ、虎らしくする能力とか人間らしくする能力を本質的特性として持つことです。

5 形而上学的実体変容

私は次に、私がこれまでかなり素描的に提示してきた材料を、存在者または存在者タイプの形而上学的進化と私が呼ぶ事態が進行する形で、形而上学者によって展開されるのがふさわしい、形而上学的な一連の（あるいは、一群の）手順または操作に、しっかり結びつけたいと思います。そうした手立ての一つが、「形而上学的な実体変容」と私が呼ぶもの^{*11}であると思います。この操作を実施する、いろいろ異なったやり方があるでしょうが、核心をなす考え方は、次のようなものでしょう。すなわち、1) 二つの実体タイプ（第二実体^{*12}）があつて、一方の実体タイプの個別事例が、他方の実体タイプの個別事例と、正確に同じ特性を持つということが、また、実際に二つ（の実体タイプ）を見分けられないということが完全に可能である、2) しかし、一方の実体タイプの構成員としての個体存在に本質的であるような特性の集合全体から、いくつか選び出してみると、それは、第二の実体タイプの構成員としての個体存在に本質的であるような特性を選ぶ場合と、同じことにはならない、というような考え方です。したがって、ある時点で、両方のタイプの本質的特性を示した何かが、後の時点になって、そのうちの一方だけの本質的特性を示すということがあり得るでしょう。二つの時点 T1 と

T2においてS1が存在し、そして、T1においてS2が存在して、しかも、S2はS1と同じものであったということがあるでしょう。しかし、T2において、もはやS2は存在せず、それ故、その時点ではもちろん、それはS1と同じものではありません。これが、船と船材に関するホップスの問題^{*13}の核心をなす種類の、また、私が同一性に関するグライス-マイロ理論^{*14}と呼ぶものの中心部分を占める種類の難問です。この理論によると、あるものxとあるものyが、ある時点では同じものだが、別の時点では、つまり、そのうちの一方が存在するのをやめた時点では、同じではないということがあり得ることになります。「形而上学的な実体変容」という操作を実行するには、ある特性または特性の集合Pをその本質的特性とするような、あるタイプの実体S1をまず置いて、次に、別のタイプの実体、すなわち、その個別事例が上の特性または特性の集合Pを実際に所有することがあるのだが、所有する場合には、本質として所有するのではない、そういう別のタイプの実体S2を導入することが必要になります。S2に本質的であるのは、他の特性の集合、すなわち、S1の個別事例のあるものに、あるいは、そのすべてにさえ、本質としてではなく、付帯することがあるような、何か他の特性の集合Rでしょう。この操作に関して、どんな実例を見出せるか、私に確信はありませんが、私が用いようと考えているのは、「人間」という実体タイプを基礎にして、別の「パーソン」という実体タイプを新たに立てるのにその操作が使われる、そういう実例です。ここで、もし以上のような仕方、実体タイプ「パーソン」を生成させるために、その操作は実行されると私たちが想定するのだとしたら、私がこの講義の最初の部分でほめかした、実体の構成に関する一般原則は、その操作が採用されることになるその企てに対して、適切な理論上の動機を特定することができなければならないと規定するはずだということ、是非とも思い出す必要があります。

さて、形而上学者によって設計される一連の実体タイプに、合理性という属性を導入することを考えるべきときがきました。合理性について話をする場合、私はそれを、まず第一に、同意するというような、恐らくは、特定可能なある特殊な集合を形成する（より一般的な言い方をすれば）態度が、理由に基づいて十分根拠づけられているとか、(価値の観念により近づけて言

えば) 正当化されているということに対する、生き物の側の関心から生じるものであると考えます。すなわち、その生き物が(自発的に) とる態度とか姿勢とか同意に、ある適切な種類の、価値の裏づけが付与されることに対する、理由を探索する者としての関心です。その生き物の合理性の能力とは、そうした関心を持つことと、そうした関心を、程度はどれほどであれ、実効あるものにするための能力を持つことを実質とするものです。形而上学的な体系への、以上のような合理性の能力の導入を、ここでは便宜的に、私が以前ある論文で使用した「遺伝子作者による構成」という考え方に従って考察することにしましょう。²⁾ 私はまず、遺伝子作者はいったいなぜ、自分が組み立てた一連の生き物の(どれであれ) どれかに、合理性の能力を付け加えるという考えに引きつけられるのかと問うでしょう。その問いに対しては、遺伝子作者が構成に従事している対象というのは、世界に対峙しつつ、自分たちの生存を維持していかねばならない一連の生物学的タイプの、本質的並びに非本質的な特徴であるというように、また、合理性の能力を一定範囲内で行使することは、生物学的な意味で有効であって、合理性の能力を持つ生き物の生存機会を改良することになるというように、答えることになるでしょう。ひとはここで、例えば、いかなる種類の状況下にある、いかなる種類の生き物であっても、ほんの少しだけ合理性の能力が混ぜ合わされることによって生物学的に改良されるなどと、度を過ぎて思うことがないように慎重でなければなりません。例えば、ブヨとか蚊は、合理的にされることによって、益されるよりはむしろ害されることになるでしょう。しかし、世界が不安定であるからか、あるいは、世界は安定してはいるが、高度に複雑なために、そこに住む住人は容易に将来の備えができないからか、そのどちらにせよ、生物学的必要性が複雑であって、自分を取り巻く環境が相当に変化しかねない生き物にとっては、合理性の能力は、生物学的な意味で恩恵となるでしょう。もし、ある生き物の生存が、広い範囲の多様な刺激に対して、異なった反応を生み出す能力に依存するとしたら、その場合には、その生き物に、適度な大きさの本能の仕組みを持たせることは、ますます難しく、ますます高つくことになって、いかほどかの合理性の能力に置き換えることが求められるでしょう。

さて、遺伝子作者による合理性の導入に関して、私たちは二つの問いと向き合うこととなります。第一の問いは、遺伝子作者は、比較的制限も制約もない能力、恐らくは、「なぜ」という問いが問われる一般的な範囲を関心の対象として取り扱う能力を導入するものとして考えられるのか、それとも、実際には、単純に問い一般を取り扱う能力、その能力に対する遺伝子作者の関心は、その能力のある適用の仕方に制約されるが、能力そのものに制限はない、そういう能力を導入するものとして考えられるのかという問いです。あるいはむしろ、遺伝子作者は、制限された能力、恐らくは、ほんの少しばかりの、潜在的に役に立つ範囲の問い（まさに生物学的な意味で適切であるような問い）を関心の対象として取り扱うための能力を導入するものとして考えられるべきでしょうか。

第二の問いは、どういう種類の、あるいは、どの程度の、合理性の能力を導入するのであれ、遺伝子作者は、それを自分が設計している、そしてそれに合理性の能力を与えようとしている、その実体タイプ（私たちはそれをホモ・サピエンスとして考えようとしています）の本質的特徴として導入すると考えられるべきか、それとも、その偶然的（非本質的）特徴として導入すると考えられるべきかという問いです。

順序を逆にして上の二つの問いに答えるための適切な手順は、遺伝子作者は、ホモ・サピエンスの非本質的な特徴として、しかし、非本質的ではあるが、ホモ・サピエンスの個体事例がそれを所有するということを、合理的に確信できるような特徴として、合理性の能力を導入するというふう考えることであると、私は立証することはできませんが、推測します。私の性格である率直さがそう言わせるのですが、遺伝子作者は、偶然的特徴として合理性の能力を備えさせるのだということを、私は自分で発見できればと思っていました。なぜなら、その場合には、形而上学的な実体変容という、私の新しいオモチャを、ためになる仕方で展開するための余地があることになるからです。そのオモチャが遺伝子作者によって用いられると、合理性の能力をその本質的特性として持つものとして考えられる、構成された実体タイプ、パーソンが与えられることとなります。これが、私の考えに、直観的に適合する帰結です。しかし、希望的観測は議論ではありません。合理性の能力を、予

測可能ではあるが、非本質的な属性としてそれに対して付加することになる、そういう新しい生物学的タイプ（ホモ・サピエンス）をまず最初に設定して、それから次に、合理性の能力を今度は本質的特性としてそれに装備させることになる、次の形而上学的操作によって、この新しい生物学的タイプを非生物学的なタイプ、パーソンに変換するための、見かけ上は遠回りなやり方を、遺伝子作者に帰属させようとする議論を、恐らくは見出すことができるでしょう。それには、まず第一に、遺伝子作者の気を引くようなプログラムというのは、生物学的実体タイプの系列あるいは王国を構成するそれであるということ、そして、合理性の能力は、そのプログラムに組み込まれるどの実体タイプであれ、それを他の実体タイプから差別化するための本質的特徴としては、妥当な種類の特徴ではないということをよく考える必要があります。もし、合理性の能力が本質的特徴としてそれに付加されることになる、そういう実体タイプが必要だとしたら、その実体タイプは、その次のステップで生成されなければなりません。

さて、先の第一の問い、遺伝子作者によって導入される合理性の能力は、制限のない能力として考えられるべきか、それとも、制限のある能力として考えられるべきかに関してですが、遺伝子作者がある目的を達成しようとする際に、その目的を実現する二つの能力があるとすれば、経済的な理由から、あるいは、遺伝子作者がすることに、動機の点で不足があるということも、充足理由の点で不備があるということもないようにするために、より弱い方の能力を装備するだろう（あるいは、装備すべきだ）とするのは、受け入れ可能な一般原則であろうと私は考えます。しかし、最初により強い能力を構築して、その後で、最初に装備されたその強い能力の実現を、制約する条件に合わせて、より弱い能力を生成させるやり方しかできない場合には、この一般原則は適用されるべきではないでしょう。そうすると、制限付きで合理性の能力を備え付けるといのは、特別な制約条件を付加的に組み込むことによってのみ達成可能となる、第二の種類の場合であって、その結果、提案された一般原則の射程からは除かれることになる、というようなことが示唆されるでしょう。この問題の解決を見ることは、骨の折れることではあるが、価値のあることだと私は思います。しかし、残念ながら、私は問題を先送り

しなければなりません。

6 絶対的価値

さて、この長々とした組み立て作業の陰に隠れたある重要な考えの正体がどういうものか、手の内を明かしはじめるやり方が、私にとって多少なりともはっきりしてきました。その考えというのは、以上のような前提が与えられて、遺伝子作者が生物学的目的の実現を促進するために、合理性の能力を新しい実体タイプ、ホモ・サピエンスに備え付ける際に、次の点に関して、期待した以上の成果を得るというものです。すなわち、新たに装備された合理性の能力は、その合理性の能力の生物学的有効性が、少なくとも最初の段階では、ある限られた範囲の問いに答えることにある、その限られた範囲の問いよりも、より多くの問いを立てることができるという点に関してです。遺伝子作者が創造する生き物は、単に、一定の目的をどのようにして達成できるかということに関して、ある範囲の問いを立てて、それに答えることができる、つまり、アリストテレスが有能さと呼んだ能力^{*15}を示すことができるというだけではないでしょう。その生き物はまた、合理性の能力が理解することを可能にする、目的とか結果の望ましきとかふさわしさに関する、問いを立てるための能力とそのために必要な関心の両方を持つでしょう。それはすなわち、その生き物は、いろいろな目的の価値に関する問いを立てることができる、それ故にその生き物は、当初は仮言的の命令を発するように予定されていたのですが、その仮言的の命令を超えて、定言的の命令を手に入れることが可能かどうかについて問いを立てることができる、そういう生き物を遺伝子作者は設計したということです。もちろん、その生き物が、一定の問いを提起してそれに対する答えを求め、そうするための能力と関心を持つということは、その生き物は、それらの問いに答えることができるということではありません。実際その生き物は、最初はそれらの問いに答えることはできないだろうと、私たちは確実に言えます。なぜなら、それらの問いに対する答えを得るための手順は、あらかじめ設計され装備されているというわけではないので、恐らくは、ホモ・サピエンス自身がそれを発達させるとか構

成るとかしなければならないからです。しかし、そのような生き物はそれらの問いに対する解答を求める正当な要求を定式化できる能力があるのだとすると、その生き物が工夫できるどんなひとまとまりの手順（それらは、手順として申し分のないもののだとして）も、それらは、もし適切なものとして受け入れられた場合には、そうした問いに対する答えを与えるために使用できるものになるのですが、そうした手順は、その生き物が適切なものとして受け入れるのが理に適っている、そういうものになるでしょう。もし、同じ問いに対して、答えを与えることに関して同じように期待できる、他の同じように申し分のない手順の、どんな候補もない場合には、そういうことになるでしょう。

もし実際に、二つ以上のまとまった手順の組み合わせがあって、それぞれに仕事をさせた場合に、どちらも、道理にあった要求に対して、答えを提供することに完全に成功するとしたら、またもし、何らかの理由から、ただ一つの組み合わせだけがその領域に残されるべきだとしたら、そしてさらに、残された複数の候補のどれにするか、恣意的でない仕方で決めるどんな方法もないとしたら、コインのトスによって決めることを道理にあったこととして私は認めるでしょう。しかし、私は、そういうこっけいな決定方法を受け入れざるを得なくなるというようなことになるのは避けたいと思っています。あるひとまとまりの手順に信用を供与する原則、その原則の採用と使用が最も満足できる仕方であつた要求を満たすことになる、そういう原則を、需要と供給の形而上学的原則と呼びたいと思います。

私の考えの核心部分の後半は、次のようなものです。すなわち、新たに発生した生き物ホモ・サピエンスは、まだ特定されてはいないある理由から、形而上学的な実体変容の操作を、いわば自分自身に施すことが、そしてまた、もともと（遺伝子作者のおかげで）ある実体タイプ、すなわち、ホモ・サピエンスに、非本質的なものとして付随している合理性の属性が、今度は、それとは異なっているが、標準的にはホモ・サピエンスと一致する実体タイプ、つまり、パーソンとしての自分自身に、本質的なものとして付随するように、その操作を組み立てることが、形而上学的に適當である（相応しい）ということを見出す、というものです。また、私たちが価値とか最終目的

のような観念を、パーソンに適用することを考えようとするとき、その場合に問題になる価値の観念というのは、相対的価値の問題ではなくて、むしろ絶対的価値のそれなのですが、そのとき私たちは、それが何であれ、そうした観念について言わなければならないことを、人工頭脳学的な因果連関の用語で言い表されるような、ある種の長話へと言い換えるとか翻訳するということは、もはやできないということを見出す、というものです。そして、これが、オーバラップの終焉が位置づけられるところでしょう。つまり、絶対的価値とパーソンの問題になるところで、オーバラップは終わりになるということです。オーバラップがここで終わりになる理由は、パーソン（本質的に理性的な存在）は、必然的に、そして恐らくは本質的に理性的であるが故に、自由であると想定することの適否によると私は考えます。

既に私が着手している、絶対的価値という観念の適用に関する正当化の試みを完遂する前に、私は二つのことをしようと思います。最初に、簡略化された業界用語を一つ紹介しましょう。次に、私が「ヒュームの投影」と呼ぶ、以前に発表した論文³⁾で言及した形而上学的な構成手順を導入（あるいは、再導入）しようと思います。簡略化された業界用語というのは、「機械論的表現に置き換え可能」という言い回しです。最初は、機械論者にとって心地よい用語で解釈されることに従順ではないように見えるが、結局は、かなり従順であることがわかる、そういう考え方とか着想を「機械論的表現に置き換え可能」と呼びたいと思います。そうすると、考え方とか着想が「機械論的表現に置き換え可能」でないということは、その考え方とか着想は、機械論者による再解釈に抵抗するということでしょう。

「ヒュームの投影」に関しては、その名称が幾らか紛らわしいかもしれませんが。というのは、何かそのような操作がヒュームによって記述されているように思われるのですが、ヒュームはそれを、私たちが言うことができればよいと思うことのいくつかを確認するやり方としてというよりは、私たちが犯す、根深い種類のある誤りを説明するやり方として見ているように思われるからです。この点で、マッキー^{*16)}はヒュームに従っていることが、私たちにはわかると思います。私の見るところでは、この操作は、いわば特定の思考のあり方として生を受ける何かをとり出して、次にそれを、思考にはな

くて、それについて思考する、思考の対象に帰属するとされる属性、実際には、ある場合には正しくある場合には誤って帰属するとされる属性へと、変形することに基づきます。私が今関心を寄せる例を取り上げると、私たちは評価するという観念、つまり、ある事柄 x について（いわば、一体化した）「価値があると思う thinking-of-as-valuable」という観念から出発して、一定の制約条件が存在すると、私たちは、事柄 x は価値があるという、単純な思いとか信念で終わることになるでしょう。そして、私たちは次に、事柄 x について価値があると思うときに、事柄 x は価値があるという属性を持つのだと、正しくあるいは誤って、思うことになるでしょう。

7 実体変容の筋書き

私は今度は、ついさっき紹介した考えを敷衍することに着手したいと思います。すなわち、絶対的価値の諸属性を、そのような属性が帰属することはある理に適った要求を満たすために必要であると述べることによって正当化しようという、また、そう述べることによって、そうした属性の帰属に関して真実を（あるいは、虚偽を）確保しようという考えを敷衍することです。

この拡大敷衍版を、二つの部分に分けて提示することにしましょう。最初の部分は、このあと、詳細は述べずに提示されて、「筋書き S」と呼ばれる、ある仮説の体系ないし筋書きとして言及されることになる、提案の骨組みを示すように設計されています。その筋書き S というのは、前述の理に適った要求を満たすことにおいて、中心的な役割を果たすことになるものです。後半の部分では、筋書きを輪郭において示しましょう。

1. 遺伝子作者は、当を得た仕方でホモ・サピエンスを構成する場合には（この構成という作業は、遺伝子作者として、生物学的な効力の、それ故に、生物学的な価値の、及ぶ範囲を、最大にするという関心によって適切に動機づけられている作業です）、以下の五つの条件を充足するような生物を構成することでしょう。

(a) ホモ・サピエンスは、自分が（または、他の個体が）自由に採用したり

保持したりする、どんな態度とか目的とか（真偽に関わる、あるいは、実践に関わる）受容に対しても、究極的には、絶対的（つまり、相対的でない）価値による正当化を、当然のこととして要求するでしょう。

- (b) ホモ・サピエンスは、前述した要求（「要求D」）を満たすという条件を、それ自身は異論の余地なく充足する、どんな仮説の体系ないし筋書きも、もしその条件がそれ以外の筋書きによって満たされることがないとすれば、受け入れるのにふさわしい筋書きであると見なすでしょう。（すなわち、ホモ・サピエンスはそのような筋書きを、受け入れる資格のある候補と見なすでしょう。）
- (c) もし、複数の、資格を有する候補があって、そのすべてがある特定の想定を含むとしたら、その想定は受け入れるのにふさわしいと、ホモ・サピエンスは考えるでしょう。
- (d) 筋書きSが、要求Dを満たす資格を有する候補であって、また、筋書きSに登場する絶対的価値の観念が世界に対して適用可能であるという想定が、要求Dを満たす他のどの筋書きにも登場する場合には、結果として、この想定は受け入れるのにふさわしいということを、ホモ・サピエンスは認めるでしょう。
- (e) また、筋書きSに登場する絶対的価値と最終目的の観念は、機械論的表現に置き換え可能ではないということ、それ故に、まともな概念であって、でたらめなものではないということ認めるでしょう。

2. 次に、電話会社とか公益企業とか保険会社が、私たちに何か新商品を押しつけたいと思っているときに、私たちにしばしば提供しようとする、親しげで、安心感を与えるような、一連の質疑応答ふうのやり方で、筋書きSを表現してみましょう。

- Q 1. 私たちは、どのようにして、要求Dを満たして、私たちの目的とか態度といったものに対する、相対的なものではない正当化を手に入れることができるのでしょうか。
- A 1. そうした目的とか態度といったものに対して、絶対的価値の概念を首尾よく適用するための条件を設定することによってです。

Q 2. 私たちはどうやってそうするのですか。

A 2. ある種の態度（など）が、公認された評価担当者によって評価される（担当者に価値があるように見える）限りで、絶対的価値を持つように、（それ故、）評価担当者の評価が、ヒュームの投影によって得られる結果から見て適格なものになるように、条件を設定することによってです。

Q 3. 私たちはどうやって評価担当者を見つけるのですか。

A 3. 私たちは、絶対的価値のありようを確立して、それを適用することが、自分の本質（あるいは、自分の仕事）であるというような存在を見つけます。

Q 4. 私たちはどうやってそのような存在を手に入れるのですか。

A 4. 生物学的な実体タイプ、ホモ・サピエンスから、形而上学的な実体変容によって、です。それによって、非生物学的な実体タイプ、パーソンが、私たちのために作り出されます。こうして私たちは、少なくとも自分自身に関しては、（パーソンという資格において）公認の評価担当者であると見られることになります。また、（パーソンでもあり、かつ、ホモ・サピエンスの見本でもある生き物という資格においては、）自分たちの自発的な活動が、自分たちが自分自身のために定める価値に、合致するものとなることが期待される存在であると見られることになります。

Q 5. 筋書き S に登場する、絶対的価値と最終目的の観念が、機械論的表現に置き換え可能であるという結末になるかもしれない（その場合には、生氣論と機械論のオーバーラップは、結局は終極に達しなかったということになりますし、問題の観念はまともなものではなくて、結局はでたらめなものだということになるでしょう）という恐れに対して、私たちは安全を確保できるのでしょうか。

A 5. はい、もし、（自分自身に関する）公認された評価担当者であるためには、積極的自由のカント的な意味^{*17}で、自由であることが必要であるということを示し、その上で次のことを示すことができれば、私たちはその安全を手に入れることができるでしょう。すなわち、もし、

絶対的価値と最終目的という、接合されて一体となった概念が、機械論的表現に置き換え可能だとしたら、そのことは、私たち自身に起源を発する態度（など）の生成に関して、「外的原因」（つまり、立法者にして行為者である者の外部にある原因）を持ち込むことになるということです。そのような外的原因は、自由が存在することの妨げとなるものでしょうし、それ故に、筋書きSの成功に対する期待を致命的に打ち砕くものでしょう。

今日のこの講義は、特に幕切れの引っ込みのところで、不鮮明で、断片的なものを多くを含むということ、また、（実際に自説を擁護しているところで）ほとんど擁護できていないということ、私は十分よく承知しています。また、もししばしの休息の後に、この論戦に舞い戻る（そういうことはないように願っていますが）としたら、私は自分が、恐らくは同じように問題の多い、しかし、まったく異なった考え方をすることになるだろうと思います。しかし、今日提示したものが、まともな理論的考察というものはいらない、そういうものからできていると思われる、そういう幾筋もの果てしない見直しの試みの一つに、それなりの出発点を提供するものとなるかもしれないという、多少の期待は抱いています。

原註（著者および編者の註）

- 1) この講義に関しては、私はリチャード・ワーナーに、特に謝意を表したい。彼の時宜を得た、巧みで、我慢強い水先案内がなければ、この講義、およびこの講義を含む一連の講義は、文字になっていなかっただろう。
- 2) Grice, Method in Philosophical Psychology, in his *The Conception of Value*, 121-61（特に、140-5）参照。
- 3) Grice, Method in Philosophical Psychology, 121-6 参照。

訳註（訳者の註）

- * 1 グライスの *The Carus Lectures on the Conception of Value* は、1983年、3日間に渡って実施された。最終日の講義、この第3章 *Metaphysics and Value* の原稿が準備される前後の状況については、Siobhan Chapman, *Paul Grice: Philosopher and Linguist*, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2005, 161-4 に詳しく紹介されている。

グライス (Paul Grice, 1913-88) は、オックスフォードの出身で、1967年にパークレーに

- 移って、1980年に教授職を退くが、その後も積極的に研究活動を続けていたようである。この講義録をはじめ、未完のまま死後に残された著作が多数あるらしい。
- *2 Grice, *Aspects of Reason*, edited by Richard Warner, Oxford: Oxford University Press, 2001 の第1章 (Reason and Reasoning) の拙訳「理性と推論」(『文学部論叢』91, 2006, 111-40) 冒頭に付した拙文参照。
- *3 ジョージ・マイロ (George Myro, 1937-87) はバークレーでグライスの同僚であった。グライスがここで示唆しているのは、Myro, Identity and Time, in Richard Grandy and Richard Warner eds., *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, Oxford: Oxford University Press, 1986, 383-409, esp. 391 で、マイロが紹介している、「グライスが言ったことは、正しいはずがないと思ったときはだいたい正しくて、だいたい正しいと思ったときは正しくない」という「グライスの法則」のこともかもしれない。
- *4 この場合、アリストテレスの『靈魂論』『形而上学』『ニコマコス倫理学』の三つが、グライスの念頭にはあると言えよう。グライスは、『靈魂論』における生命の話、『ニコマコス倫理学』における価値の話に結びつけるものは形而上学であると考えていたように思われる。
- *5 生氣論 vitalism は、ここでは広く、人間の活動を含むすべての生命活動・生命現象は何か機械論的に(唯物論的に、物理主義的に、還元主義的に)説明できるとする主張を、結局は否定するような考え方を言うのだと思われる。グライスはさらに数歩進んで、目的とか価値といったものが世界の構成要素として存在すると主張しようとしている。
- *6 人工頭脳学 cybernetics の考え方によると、あるシステムの出力の一部を逆向きにして元に戻してやると、出力が抑えられて(ネガティブ・フィードバック)、システム全体は安定した状態になり、恒常性 homeostasis が維持される。
- *7 デイヴィッド・アームストロング (David Armstrong, 1941-) はオーストラリアの哲学者。1950年代にオックスフォードで学び、学位 (Bachelor of Philosophy) を得ている。グライスはそのとき出会っているのかもしれない。
- *8 カタストロフィー理論によると、不連続的な変化は数学的に表現できて、数学以外の諸科学(経済学や生物学)にも応用できるようになる。1970年代のバークレーは、そうした応用研究の拠点の一つであったらしい。
- *9 フィリッパ・フット (Philippa Foot, 1920-) はオックスフォード出身で、ロサンゼルス校に長くいた。The Carus Lectures on the Conception of Value の第2章 Relative and Absolute Value (Grice, *The Conception of Value*, 47-67) は、フットの Morality as a System of Hypothetical Imperatives, *Philosophical Review* 81, 1972, 305-16; and in Foot, *Virtues and Vices and Other Essays in Moral Philosophy*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1978, 157-73 に批判の矛先を向けて、議論を展開している。
- *10 テリー・アーウィン (Terence Irwin) とアラン・コード (Alan Code) は、アリストテレスを含む、あるいはアリストテレスを中心とする、西洋古代哲学の専門家。コードはバークレーでグライスの同僚であった。本質に関しては、Grice, Aristotle on the Multiplicity of Being, *Pacific Philosophical Quarterly* 69, 1988, 175-200 と Code, Aristotle: Essence and Accident, in Grandy and Warner eds., *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, 411-39 という、連続した関連する論文がある。グライスのものは、自身が1979年にカナダのある大学でのシンポジウムにおいて口頭発表した 'Aristotle on Being and Good' を下敷きに行っているらしい。アーウィンの名前がここにある理由はよく分からない。もしかすると、そのシンポジウムでいっしょだったのかもしれない。あるいは、アーウィンは1960年代にオックスフォードの学生だったので、もともと知り合いで、二人の間で何かやりとりがあったとい

うことなのかもしれない。

- *11 「形而上学的実体変容」については、Grice, Reply to Richards, in Grandy and Warner eds., *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, 102, 105; and Grice, Reply to Richards, Final Section, in his *The Conception of Value*, 114, 118 でも触れられている。
- *12 第一の実体（個体）の「何であるか」を示すものが「第二実体」。
- *13 ホブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）が *De Corpore*（1665）で論じている、船材をすべて取り替えて作り直した船と元の古い船材を使って組み立て直した船は同じ船かという、古くは「テセウスの船」という名前で知られる、同一性をめぐる問題について、David Wiggins, *Sameness and Substance*, Oxford: Blackwell, 1980, 92-9; *Sameness and Substance Renewed*, Cambridge: Cambridge University Press, 2001, 92-102 が詳しく論じている。Wiggins のこの（？）迷惑な著作にはさらにオリジナル版（*Identity and Spatio-Temporal Continuity*, Oxford: Blackwell, 1967）があって、グライスの研究グループは、1970年代のはじめにそれを読んでいたらしい。
- *14 同一性に関するグライス－マイロ理論については、Myro, Identity and Time, in Grandy and Warner eds., *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, 383-409, esp. 390-3 参照。
- *15 アリストテレスが「有能さ *deinotes*」と呼ぶ能力については、『ニコマコス倫理学』第6巻第12章（1144a23-b1）参照。
- *16 マッキー（John Leslie Mackie, 1917-81）は、オーストラリア出身の哲学者。グライスより少し年下で、1930年代にオックスフォードで学んだ。グライスとは、そのとき以来の、旧知の間柄だったらしい。The Carus Lectures on the Conception of Value の第1章 Value and Objectivity (Grice, *The Conception of Value*, 23-45) は、マッキーの *Ethics: Inventing Right and Wrong*, New York: Penguin Books, 1977 の懐疑主義的で反客観主義的な考え方を批判の対象としている。
- *17 「積極的自由のカント的な意味」というのは、恐らくは、Grice, Actions and Events, *Pacific Philosophical Quarterly* 67, 1986, 1-35, esp. 33-5 で言われている「自由の特別に強い意味」のことだと思われる。グライスは、デイヴィドソンの「欲求と信念による行為の分析」では不十分で、評価（valuation）と究極目的の選択（selection of ultimate ends）に関する考察が必要であるとする。